

4 若手肉用繁殖牛農家への重点的な指導について

対馬家畜保健衛生所

中川 竜太郎・安重 由美子・浦川 明久

対馬における繁殖牛飼養農家の年齢別割合は、図-1のとおりで、高齢化による離農の進展により、年々農家戸数が減少し、また、島内の18か月齢以上の繁殖雌牛頭数別農家割合は、20頭未満の農家が9割を占めている。

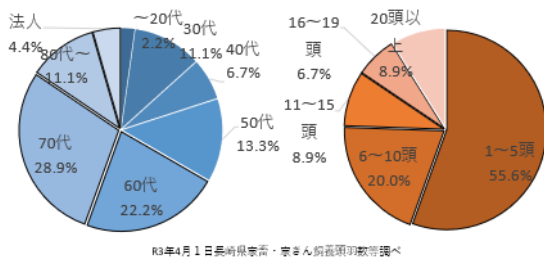


図-1 繁殖牛飼養農家の年齢別割合及び飼養頭数別割合

このような中、新規就農者や後継者が規模拡大を図っており、当所では牛舎を増築した若手2農家（A、B）に対して重点的に指導をしたのでその概要を報告する。

1 農家概要

農家AはH29年10月に後継者として就農し、繁殖雌牛50頭飼養を目指しR2年16頭からR4年27頭に増頭傾向にあり、R2年4月に牛舎増築、9月に早期離乳を開始及び牛温計の導入、R3年8月にファームノートカラーを導入した。Aの増築前の繁殖成績は空胎日数が非常に長い傾向にあり、繁殖雌牛は過肥気味でボディコンディションスコア（以下BCS）7を超える個体が多く確認できた。

農家BはH29年1月新規就農、R2年12頭からR4年18頭と増頭傾向にあり、R2年4月に牛温計を導入、R3年12月、増築した。繁殖雌

牛はやや痩せ気味でBCS5前半が確認された。

両農場のR2年度平均セリ価格は市場平均より15万円以上安価であり、1日平均増体量（以下、平均DG）も家畜市場の平均に達していなかった。

また、子牛の診療頭数もR1年度から増加傾向にあり、消化器病が大半を占めていた。

両農場とも増頭により管理不足や粗飼料不足が起こり、繁殖成績の低下が懸念され、さらに子牛育成が課題になっていると思われる。

2 対策内容

（1）繁殖指導

繁殖データを元に発情不明牛の早期検診、治療および授精後40日以内の早期妊娠鑑定と治療を実施し、繁殖ステージに応じた飼料給与指導を行った。

R3年度、人工授精後40日以内の早期妊娠鑑定をAで34頭、Bで15頭、発情不明牛の治療を、Aで6頭、Bで4頭実施しました。そのうち、ICTで発情不明な長期不受胎牛の治療をAで2頭実施した。

繁殖ステージに応じた飼料給与については、分娩前後の増し飼いで個体ごとの状態を見て給与量を調整するよう指導、また濃厚飼料給与にばらつきが生じないように計量するよう指導した。

（2）粗飼料確保対策

牛温計などのICTを利用し牛舎の滞在時間を減らすよう指導した。

（3）消化器病発生防止指導

Aでは食餌性が原因と考えられたので、人工乳の1日の哺乳回数を増加させ、1回の哺

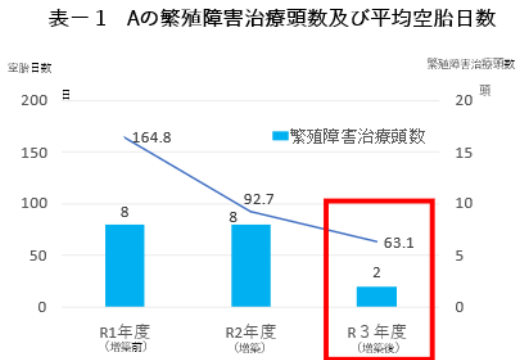
乳量を少なくし、胃の負担にならないよう指導した。

Bでは、ロタウイルスやコクシジウムによる消化器病が原因と考えられたので、分娩房の衛生管理として、定期的な牛床の消毒、症状の早期発見、早期治療できるよう指導した。

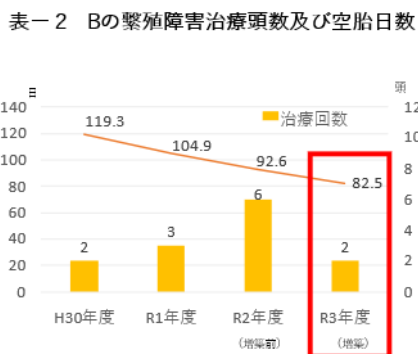
両農場の発生予防として、分娩房の消毒、敷料の定期的な交換を指導した。

3 結果

R3年度、農家Aの繁殖障害治療頭数及び平均空胎日数は増築前のR1年度と比較し、繁殖障害治療頭数は8頭から2頭に減少し、平均空胎日数も164日から63日に短縮した(表一1)。

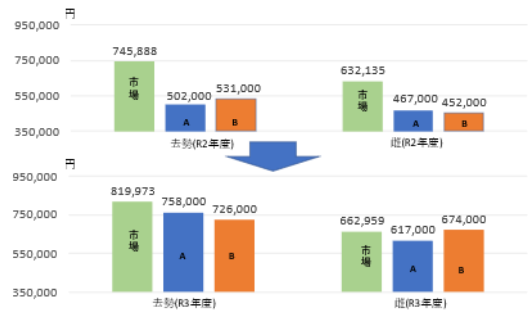


農家Bも繁殖障害治療頭数はR2年度6頭から2頭に減少し、平均空胎日数も92日から82日に短縮した(表一2)。



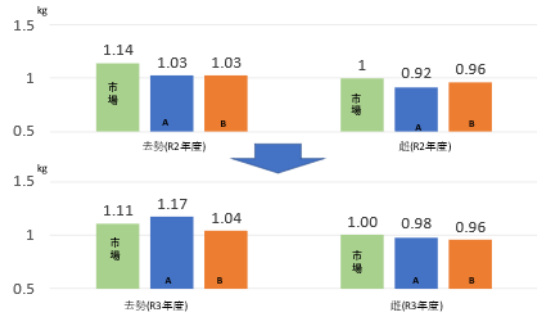
両農場の家畜市場の平均セリ価格 R2年度よりも概ね15万円以上セリ価格が上昇した(表一3)。

表一3 家畜市場、A、Bの平均セリ価格



平均DGも農家AではR2年度より増量が確認できた(表一4)。

表一4 家畜市場、A、Bの平均DG



また両農場のR3年度の子牛の診療内容は全て消化器病で、のべ頭数はAで19頭、Bで9頭であった。

4 まとめ

指導した両農場で繁殖成績の向上が確認された。Aの繁殖成績向上はファームノートカラーと早期離乳、繁殖指導によるものと考えられる。Bは子牛を2か月齢まで母牛と牛房に入れていることが平均空胎日数の短縮に影響していると考えられる。今後ファームノートカラーを導入予定であるので、更なる繁殖成績向上が見込まれる。

Aの子牛の診療回数が増加した原因として、早期離乳に不慣れなためと考えられるので、今後も継続して対策を講じていきたい。

両農場の出荷牛の平均セリ価格は壱岐家畜市場平均セリ価格に達しておらず、今後も指導を継続していく。